



2010年

11月



地域資源

菜の花プロジェクトの先進地・京丹後市へ出かけました。9月23日、大雨洪水警報が発令される悪天候を突いて西淀川からバスに乗り込んだのは、大阪府内で菜の花プロジェクトを実践している小学生、中学生、大学生、そして大人ら総勢32人。現地の天候は曇、気温16℃。ご当地食材をふんだんに使った弁当に舌鼓を打った後、てんぶら油から生まれたBDFで車を動かす現場や「ゴミは資源」を実践している農場・タケちゃんファームの見学：参加者は丹後半島の豊かな自然を生かして「ひとの環」をつくる現場体験に「楽しかったあ」と大満足の一日でした。「エコネット丹後」の皆さん、ありがとうございます！

●目次

特集 「公害を学ぶ場」をつくる資料館

ESDとしての公害教育スタディツアー	井上 有一	2
公害地域の今を伝えるスタディツアー2010	眞鍋麻衣子	4
スタディツアーの感想	奥田みのり、江見可菜恵、清水万由子 内藤陽介、工藤明日香	6
2010年のエコミューズ	林 美帆	8
〈中国からの手紙〉Temaca滞在記	張 亜 東	3
交流の場が誕生します!	北中 大輔	9
〈リレーエッセイ〉みつけてみませんか?あなたのそばの「アーカイブ」	森本 米紀	10
〈忙中一筆〉記録よりも記憶	大滝 あや	12

特集 「公害を学ぶ場」をつくる資料館

環境について関心を持つ人は増えています。

しかし、公害となるとどうでしょうか。

「公害は終わっていると思っていた」という声をよく聞きます。

「公害を学ぶ」「公害を伝える」について西淀川・公害と環境資料館(エコミュージ)で行っている取り組みを紹介します。

ESDとJITの公害教育スタディツアー

井上 有一

「どのような公害教育をされていますか」—この問いに、ある学校教育の担当者(環境教育)は「いやまったくなにもしていません、ESD(「持続可能な発展のための教育」)で忙しくて公害教育に割く時間などありません」と答えたという。歴史的に公害とさわめて深い関係にある自治体でのことである。この発言は、今日、公害教育がどのように捉えられているかを端的に示している。環境教育は、持続可能で公正な社会、また一人ひとりが満足できる豊かな生き方の実現に寄与するものではないのか。この担当者の認識は根本的に間違っている。

ESDの精神に反する逆方向へ

昨今、ESD (Education for Sustainable Development) が注目され、関連する多くの取り組みがなされている。ESDは、1997年、ギリシャのテサロニキで開催された国際会議で採択された宣言で公式に誕生した。この宣言は、自然の理解や野

外での活動といった狭い意味から環境教育を解放し、「持続可能性」という概念は、環境だけではなく、貧困、人口、健康、食糧の確保、民主主義、人権、平和をも含む」と書かれているとおり、政治性や社会性の次元に教育活動を拡大する必要を認めるものであった。ここで求められるものは、社会に支配的な考えに代わりうる発想や価値観であり、根底からの社会変革である。しかし、ESDという用語は社会に普及しても、こうした社会批判性や政治性に深くかわる教育的営みが活発になされているかという点、かならずしもそうはなっていない。

2005年、日本政府の提案による「国連・ESDの10年」が始まった。ESDが、政府による指示や指導のもとで展開されるなら、いま求められるラディカルさ(現状に対する根底からの変革志向性、深い問いかけ)は期待すべくもない。節電や省資源にかかわる上意下達の指示を唯々諾々と受け入れ黙々とこれに励むこ

とが推奨される「家庭のこころがけ」路線がその典型であろうが、こうした環境教育の脱政治化・脱社会批判の流れは、テサロニキ宣言に示されたESDの精神に反して持続可能な未来の実現とは逆の方向に社会を導くものになる。

「公害は終わっていない」

日本の環境教育は、ルーツのひとつを公害教育に求められる。「公害は終わっていない。」それは、一義的に、被害が放置され理不尽な不正義の問題が解決していない、社会の基本構造が変わっていないということであるが、さらに加えて、公害に関わる経験や取り組みに真摯な学びを得て、エコロジカルな(持続可能で公正な社会、豊かな生を実現できる)未来のあり方やそこに至る道筋をみずからの頭で考えて、行動に移していく重要な契機になるということでもある。知ること、批判的に考え、社会の構造的な問題に目を向け、みずからの取り組みという行動に移していく。こうしてわたしたちは日本の環境教育の、社会批判性を豊かにもつこのルーツの重要な成果を現在に生かしていくことができる。

公害地域再生センターの「公害地域の今を伝えるスタディツアー」は、まさにこの「公害を学ぶ」意味の重



阿賀のお地蔵さんの前で旗野秀人さんから説明を受ける（左端：井上氏）

要性を具現化したものである。それは、この企画の軸となる高田研さん（都留文科大教授）や林美帆さんはじめ「あおぞら財団」のスタッフの深い見識と用意周到な実施計画、そして公害被害地域でツアーを受け入れて下さるみなさんの献身的なご尽力があつて初めて実現するものであるが、現地で出会う現実は強烈なインパクトをもつて個々のツアー参加者に迫ってくる。ツアー参加後に提出されたレポートを読むと、それがじつによくわかる。積極的に社会と向き合い、より多くを知ろうとみずから努め、自分の頭で考え、主体的に判断して行動するという姿勢を、多くの参加者が現地で直接的な学びを得るなかで自然と身につけていく。こうした市民教育の要素を多分にもつこのスタディツアーは、まさにESDテサロニキ宣言が投げかけた課題に正面から取り組むものといえよう。（いのうえ・ゆういち 京都精華大 学教授）

お詫び

2010年9月号2～3面「変貌する西淀川」の、著者の所属が未記載でした。お詫びして再掲載いたします。

「変貌する西淀川」山崎晋一（やまざきしんいち 株式会社日建設計）、神吉紀世子（かんききよこ 京都大学大学院工学研究科准教授）



Temaca 滞在記

張 亜 東

その5つのテーマに分かれ、参加者は自分の需要に応じて選択的に会議に参加することができた。そのほか、大会はまた地域別会議を設け、地域間の協力を深める場となった。

私を含めて中国からは7人が参加した。私たちは、東南アジアの参加者と雲南省の河川水利開発が下流国家に与えた影響について、アフリカの参加者と中国の会社がアフリカでダムを建設する状況について、またインドの

参加者とヒマラヤ山脈の水源の保護について、さらにロシア、モンゴルの参加者と国境を越える黒竜江の保護についてそれぞれ意見を交換した。



東アジア、東南アジアからの参加者が、区域間の交流・協力のあり方について討議する。拍摄：汪永晨

10月2日から7日まで、International Rivers の招待を受け、私はメキシコの小さな町 Temaca で開催される第3回命の河国際会議に出席した。その間、私は世界60数カ国の300数名の河川保護運送家と一緒に忘れられない5日間を過ごした。

Temaca は600数年の歴史を有するが、近所のVerde川にElzapotilloダムを建設することにより、近い将来街全体が水の下に沈むこととなる。自由な河川と美しい故郷を守るため、Temacaの人々は自ら立ち上がり闘ってきた。それゆえ、今回の会議はTemacaの人に対する支持活動でもあった。

会議においては、各国からの参加者がダムが生態環境、社会文化およびコミュニティ住民に与える影響について討議し、河川保護に関する行動経験を分かち合った。今大会は次のような7つの主要議題を設置した。すなわち、効率的な社会運送家、気候変化と水の管理、有効なコミュニケーション、ダムの基準と財務計画、権利と補償、エネルギーの解決案および政策と実践から河川を保護・回復することなどである。個々の議題はさらにおおよ

張亜東

黒竜江流域内において活動する NPO「緑色龍江」の総幹事で、自然保護と環境教育を行っています。11月27日の「日中環境問題サロン2010 対話から築く日中の環境教育の協働」で報告させていただきます。

を伝えるスタディツアー 2010

～新潟水俣病の地を訪ねて～(2010年8月5日～8日)

昨年度から行なわれているスタディツアー、2年目の今年は、スタッフをあわせて43名の参加者で新潟水俣病の地を訪ねました。

ツアー本番に先立ち、立教大学教授・関礼子氏を講師に迎えて事前勉強会を行い、参加者各自がそれぞれ課題や目標を持って、ツアーに臨みました。ツアーでは4グループに分かれて様々な立場の方にお話を伺ったりフィールド見学を行い、最終日に発表会を行いました。その様子を報告します。

2日目・3日目

B班



高野秀男氏

A班



福島市男氏



坂東克彦氏



旗野秀人氏



安田患者の会のみなさん



小武節子氏

関川智子医師から診察のお話などを聞きました



朝から各グループに分かれてヒアリング。また阿賀野川流域や昭和電工の工場跡周辺などのフィールド見学も行いました。夜には全員一緒に水俣病に長年関わっている医師の話を聞きました。3日目の早朝には探鳥会を行い、福島潟の豊かな自然に触れ合うことができました。その後はヒアリングを行い、午後にはグループで学んだこと、感じたことを出し合い、内部発表会を行いました。その後各グループに分かれて、4日目の全体発表に向けて再度発表内容を練り直しました。意見や伝えたいことの食い違いなどから、意見がまとまるのが深夜になったグループもありました。

1日目

ツアー初日には大阪と山梨からのバスで新潟に向かいました。朝一番の出発でしたが、それでも到着したのは夕方。新潟はさぞ涼しいだろうと思っていたら、36度を超える真夏日でした。到着後は新潟水俣病資料館（新潟県立環境と人間のふれあい館）の塚田眞弘館長に資料館の案内と、水俣病の概要を説明していただきました。



塚田館長による館内の案内

各グループのヒアリング

班	ヒアリング協力者	内容
A班	福島市男氏 (元新潟日報)	地元マスコミの報道について
	小武節子氏 (2次原告)	生い立ちや被害・裁判について
	坂東克彦氏 (弁護士)	裁判の経過
	橋本広一氏 (水俣病被災者の会)	被害や生活について
	斎藤忠平氏 (水俣病被災者の会)	
B班	高野秀男氏 (新潟水俣病共闘会議事務局長)	共闘会議のなりたちや活動について
	小武節子氏 (2次原告)	生い立ちや被害・裁判について
	坂東克彦氏 (弁護士)	裁判の経過
	旗野秀人氏 (冥土のみやげ企画)	支援者の立場から
	安田患者の会の方々	被害や生活について
C班	山田サチコ氏 (阿賀野患者会)	生い立ちや被害・裁判について
	酢山省三氏 (阿賀野患者会)	4次(ノーマ・ミナマタ訴訟)の裁判について
	阿賀野患者会の方々	生い立ちや被害について
	中村周而氏 (弁護士)	弁護士として裁判に関わる思い
	小山衛氏 (新潟県福祉保健部) 小池美夏氏 (新潟県福祉保健部)	県の取り組みについて
D班	近四喜男氏 (新潟水俣病被害者の会)	生い立ちや被害・語り部活動について
	阿賀野川流域地域フィールドミュージアム事業の方々	FM事業の地域づくりについて
	新潟水俣病教師用資料作成委員会 (波多野孝氏)	教育現場での水俣病について

4日目



グループごとに発表・提案

発表会にはこの3日間でお話を聞かせていただいた方々が参加され、発表するツアー参加者は少し緊張した面持ちでしたが、ツアーでの聞き取りなどを受け入

4日間のハードスケジュールではありましたが、現地で暮らす人たちに触れ合うことで、本を読むだけではわからないことを学ぶことができ、自分は何ができるのかを考えることができた4日間だったのでないかと思えます。現地の方々にも、お話しづらいこともたくさんお伺いしました。その思いに報いるために、

提案内容(一部分)

A班	私たち自身も伝えたい(新聞への投稿など)、そうすることで患者さんにも、伝えることは意味があるんだと背中を押したい
B班	立場の違う人達が色んな形で患者さんへの支援を行なっている。今後、患者さんが生きやすいシステムをどう作っていくのが課題として挙げられる
C班	8月8日を私達の「新潟水俣病の日」にし、この日はまわりの人に伝えるなど、できることをしたい
D班	新潟水俣病の光と影を考え、伝えていくためには自分には何ができるのか、各自「宣言」

それそれが学んだことをそれぞれが学んだことを拡げていければと思います。

5日目



昭和電工の方々

最後に、全員ではありませんが被告企業の昭和電工を訪問し、昭和電工の姿勢やツアーに参加したことで生まれた疑問などについて答えをいただきました。当事者でないからこそ、言うこともあったのではと思います。

(眞鍋麻衣子:財団研究員)

昨年のスタディツアーの様子はこちらに載っています。
<http://www.studytour.jpn.org/>
 今年の様子は年度末に掲載予定です。

公害地域の今

スタディツアー日程

	午前	午後	夜
1日目 8/5(木)	バスで移動	現地に到着 新潟水俣病の概要を聞く	グループ分け
2日目 8/6(金)	グループに分かれてヒアリング	現地見学	全体でのヒアリング
3日目 8/7(土)	探島会 グループに分かれてヒアリング	現地見学 ヒアリング結果のまとめ提案作業 内部発表会	ヒアリング結果のまとめ提案作業
4日目 8/8(日)	発表・交流会	解散	
5日目 8/9(月)	昭和電工ヒアリング		

C班

山田サチコ氏



中村周而氏



D班

近四喜男氏



波多野孝氏



酢山省三氏・4次原告の方々



新潟県福祉保健部の
の方々



探鳥会の様子



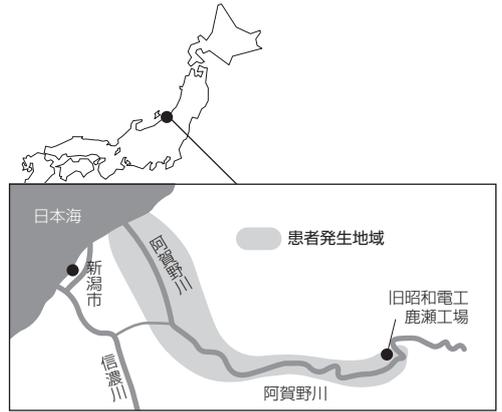
FM事業、ここのメンパーによる紙芝居の披露

スタディツアーの感想



グループで発表内容の話し合い

参加者の皆さんの感想は、どれも内容が豊富で面白いものばかりでした。その中から一部紹介します。



フリーランス
奥田みのり (A班)

新潟水俣病の現地ツアー最終日、私たちのグループは、新潟で水俣病について語ることがタブー視されているなか、現地の方々が私たちに語ってくれた理由を考え、おそらくそれは私たちを「信頼」してくれたからだとして発表した。

全てのグループの発表が終わり、みんなが資料館を後にするなか、私は地元のある方と個人的に話をした。そこでこう問われた。

語るごとく信頼

「あなたたちのグループの発表では、相手への信頼があったから、地元の人が語ってくれたといわれたけど、ではなぜ、地元では、未だに水俣病について語るこゝとができないのだと思いますか？それは信頼がないからではないでしょうか」

私たちが発表で話した「信頼」は、外から来た私たちと、地元の方々との関係についてであった。地域の人間同士であれば、新潟のどこに住んでいるのかという地域属性、患者か患者でないか、裁判をしたかしていないか、どこの患者組織に所属しているのか、といった様々な情報

違いを理解し乗り越えるために



同志社大学大学院
江見可菜恵 (B班)

今回話を聞いてきた、新潟水俣病を巡る一連の事件に関り、なんとか患者を救おうと取り組んできた人たちは、いわば歴史を動かしてきた人物である。その歴史上の人物たちに直接マイクを向けて事の真相を聞くことはとてもエキサイティングであり、興味深い体験であった。そうして色々な立場の人物たちの話を聞く中で結局どこにも完全な正しさや間違いなどないのだ、善とは一つではないのだという結論に辿り着いた。

正義のために闘う坂東弁護士も、和解

金を受け取るもかたりべとして活動する小武氏も、訴訟からは遠ざかり、今は患者に寄り添った支援をされている旗野氏も、皆自分の信念で自分に出来ることをしていた。それらの信念が符合しないこともある。時に相手の信念が重く感じることもある。考え方の違いでぶつかることも有る。それらはいつもとでも微妙なバランスの上であり、感情的なことでもぐらぐら揺らぐ。しかしそれでいいのだと思う。完璧な人間などおらず、理論だけで推し進められる解決策などないのだ。しかし願わくば、皆協力し合うのが一番いい。そのためにも相手と自分の不完全さを認めた上で、その違いを理解し、乗



安田患者の会のみなさんと一緒にドンパン節

が、相手との信頼関係に影響を及ぼしてしまう。しかし、そうした一切の属性と無関係な外部から来た人間——つまり、私たちのような者は、外者（そのもの）であるがゆえに、それだけで、話を聞く機会に恵まれているのかもしれない。

新潟での発表で私たちは、地元の方の話は、私たちに勇気と希望を与えてくれたと述べた。「語る」ということが、聞かせる者を勇気づけてくれる。であれば、様々な事情で、語ることができないでいる人たちに、語ることが秘めている力について、（おこがましいが）伝えることができたなら、もしかしたら、次なる語り手として手を上げてくれるかもしれないとも考えた。

乗り越える為にはやはり根気のある「もやいなおし」が最も有効な解決手段であるうと考える。

私は一消費者として昭和電工に、新潟水俣病に関する意見を定期的に送りたいと思う。昭和電工は現在、化学・環境教育への取り組みに力を入れており、日本国内だけでなく海外での活動もさかんに行っている。しかし、企業ホームページには「新潟水俣病」に関する記述はなく、



都留文科大学3年
工藤 明日香 (C班)

昭和電工への意見

一連の活動でも「新潟水俣病」を取り上げているようすはない。本当に化学・環境教育に取り組むのであれば、自分たちの会社を引き起こした公害以上のテーマはないと思うのだ。

具体的なものとして、昭和電工は社員全体の新潟水俣病に関する認知度や、新潟水俣病に関する社内教育をどのように行っているのかをより外部に知らせる必要があると思う。そのためには関係者以



塚田館長と一緒に、スタディツアー参加者の集合写真



長野大学研究員
清水 万由子 (C班)

素直に自分の心を重ねる

取材を重ねる中で、たくさんさんの「なぜ？」がありました。グループで話し合いをしながら、また他のグループの発表を聞きながら、今の自分にまずできることは、学校のレポートを書くように、事実を分析して、「なぜ？」の答えを出すことではないような気がしてきました。当事者にしかわからない経験や思いが、たくさんあります。こうしたら、と一般論として提案することはできるかもしれないけれど、それがすぐにできるなら苦労はないでしょう。阿賀野川の暮らしも病気の苦しみも偏見も知らない、それは程遠い生活しか知らない自分が、当事者の方々の背中をそっと押すようなことができるのか。



都留文科大学3年
内藤 陽介 (D班)

五感をフルに使う

グループで決めた「私たちの新潟水俣病の日をつくる」という提案は、今の自分にしっくりくるものだったと思います。頭であれこれ考えることをいったんやめて、目の前で話をしてくださった方々の

外の人間もまた、そういった情報を知りたいと思っていることを示さなくてはならない。だからこそ、消費者の声として意見を送ることに意味があると感じている。私は自らが新潟水俣病に犯されているわけではなく、正直に言ってしまうと、当事者のように問題にぶつかっていく覚悟もない。だが、こうしたことで課題解決への力となれたらいいと思っています。



草倉銅山の跡地を見学

探求心が湧かなかつたと思います。公害病だけでなくこれからいろんなことを学ぶ機会があると思いますが、頭で考えてわからない時は実際に自分で現地に足を運び自分自身で感じていこうと思います。

心に、素直に自分の心を重ねること、そこで感じ取ったことを自分自身の思いとして表現して、誰かに伝えること。これが、新潟水俣病の日の過ごし方です。それで直ぐにどうなるわけでもありませんが、これがなければ、いつまでたっても当事者の方々の背中に触れることはないように思います。

侯病の事実を受け止め来世にどう繋げていくかを考えていくことが大切だと感じている。このツアーに参加できたことにより水俣病を学ぶ以上に五感をフルに使うことで得られる結果が違ってくるということを感じた。自分で見ていることで自分のモノになるという感じがした。だから今回のことはきっとわすれないと思う。今回のことを機縁にほかの公害病についても詳しく調べたいと思いました。このようなツアーがなかったらこんな気持ちになれなかったし探求心が湧かなかつたと思います。公害病だけでなくこれからいろんなことを学ぶ機会があると思いますが、頭で考えてわからない時は実際に自分で現地に足を運び自分自身で感じていこうと思います。

2010年のエコミューズ いろいろな人に活用してもらっています！

林 美帆

エコミューズ（西淀川・公害と環境資料館）が開館してから4年がたち、来館者が1700人を突破しました。この間、展示パネルの作成や、見学の受け入れ、授業や研究のお手伝い、所蔵資料の整理などを積み重ね、少しずつみんなが使いやすい資料館に整えています。エコミューズで行っている活動をご紹介します。

電子化した所蔵資料が読める ホームページを作成中

エコミューズにある膨大な裁判資料、住民運動資料を手軽に見てもらって、教育や研究の促進につなげたいと願い、2006年から3年間、所蔵資料の一部を電子化してきました。今年度末には環境再生保全機構ホームページの「大気環境の情報館」の中に「記録で見



西淀中学校2年生が作った
患者さんの等身大パネル

る大気汚染と

裁判」のコーナーで紹介されることとなります。このホームページができると、公害裁判や、公害の問題がわかりやすくなるはず！完成の暁には皆様にお知らせします。

西淀中学校の地域学習のお手伝い

西淀中学校2年生は5クラスあるので、3組が公害をテーマにして地域学習を行いました。6月に2年生全員にエコミューズスタッフから西淀川公害の話と、7月に公害患者による語り部の授業を行い、2学期になってから3組は「裁判・判決」〈公害による病気〉〈大気汚染〉〈住民運動〉〈今後の西淀川〉のテーマに分かれて学習することになりました。各グループがエコミューズの資料を借りて作ったのが「公害新聞」。難しい本も一生懸命読んで新聞にまとめたようです。患者さんの等身大パネルもなかなかの壮観でした。「過去の西淀川区は公害とかが悪かったけどこれからは良い西淀川区をみんなで作りたいです」と感想が書いてあり、うれしくなりました。このような公害学習が一過性ではなくて、継続して取り組めるようにしていきたいと願っています。

大阪歴史博物館特別展「水都大阪と淀川」に資料提供

裁判資料の中にあつた、井上善雄弁護士が撮影した出来島の市営住宅から撮影した淀川のパノラマ写真が展示されています。患者さんの岡崎さん、塚口さんが持っていた昔のスナップ写真も展示しています。まだ会期中なので、ぜひ大阪歴史博物館へ。
(会期：2010年11月15日まで)

ほかにも「西淀川記憶あつめ隊」の活動をはじめました。(現在模索中)

ホームページリニューアル

資料館ブログもあります。最新情報をお伝えできるよう、スタッフ一同、努力しています。

(はやし・みほ あおぞら財団研
究員)



壁にはられた「公害新聞」

交流の場が誕生します！

体と環境に配慮して

あおぞらビル1階スペースが「地域住民の交流の場」として生まれ変わります。これまで駐輪場・駐車場として利用していましたが、地域住民のみなさんが集い交流できる場として活用していくため改修工事を行ってきました。

工事は設計士、大工の指導の下、作業はボランティアで行ってきました。地域のみなさんや学生がボランティアとして協力していただき、交流を深めています。

工事の流れは、今年の7月から1階の天井や壁の解体工事を始めました。その後、設計図に合わせて壁を立ち上げ天井を吊り下げ、床をはりました。

原稿を書いている時点では、まだペンキが塗れていないところ、扉がついていないところなどありますが、「地域住民の交流の場」がほぼ完成しました。

工事を行う上でこだわりをもって進めてきました。〇オスモ〇という植物油と植物ワックスからできていて体と環境に優しい自然系塗料を使用しています。木の質感を

残しつつ触り心地のよい仕上がりになっています。

活用法を提案してください

今後はどのように活用していくかに話題が移っています。作ったのに誰も使わないではもったいないです。あおぞら財団としても楽しい企画を提案していきますが、地域のみなさんにも企画していただきたいと考えています。コンサートしたり、教室を開催したり、お茶を飲んだり、…こんなものがほしい、こうしたらよいというものが

北中 大輔

オープニングイベントを開催します

1階の交流スペースの完成を地域のみなさまと祝い、活用していただくためオープニングイベントを開催します。当日はセレモニーの他、コンサートや写真展等を開催します。ご都合のよい方はぜひ、遊びに来てください。

日時：12月4日(土) 13時半～16時
場所：あおぞらビル1階

ありましたら、どんどん提案してください。楽しいことが盛りだくさんの交流スペースにしていきましょう。

最後になりましたが、作業にご協力いただきましたみなさん、ありがとうございます。

(きたなか・だいすけ あおぞら財団 究員)



ほっと ニュース

西栄寺 万灯会

8月16日、西栄寺（西淀川区千舟）で「万灯会」が行われ、あおぞら財団が事務局をする西淀川ESDも出展をいたしました。西栄寺は、廃油回収の拠点として西淀川菜の花

プロジェクトに参加しているお寺です。環境問題に対するメッセージやイラストなどを描いたシエードを巻いた廃油缶を火を灯し展示しました。廃油缶もシエードも、西栄寺の空手教室を受講する子どもたちが作成したものです。自分が絵を描いたキャンデルの前で記念撮影をする親子の姿も見られる等、廃油キャンデルの取り組みは大好評でした。

12月22日に企画している「キャンデルナイトin西淀川」廃油キャンデルで緑道を灯そう〜へ、ぜひこの経験を活かしていきたいと思えます。

大学生 西淀川の環境まちづくりで活躍

夏休み、小学生を対象にした西淀川の環境教育のイベントに、大学生が活躍しています。

8月3日4日には、大阪経済大学の学生6人の企画・運営によるイベント「空気の汚れを調べてみよう（二酸化窒素の簡易測定）」を行いました。この大学生は大阪経済大学、地域・社会調査（遠州尋美教授）の受講生。西淀川公害や環境まちづくりを学んだ上で、子どもたちに地域環境を守ることの大切さを伝えるという授業の一環で

す。

また、8月17日に開催した「セミのぬけがら調べ」では、あおぞら財団のインターン生12人が大活躍。段ボールでつくったセミの羽根やお面を身につけて、セミの一生を面白おかしく寸劇で説明したり、本番の調査ではグループリーダーとして、子どもたちの指導にあたりました。

中国で環境NGO、公害被害者と交流しました

平成22年度大気汚染経験情報発信事業として、2010年8月28日から9月2日までの間、中国環境NGOとの交流、中国における公害被害地域の視察のため中国に訪問しました。

この事業は我が国における公害経験やそれに関連する資料を中国側と共有するため、情報発信・人的交流を行なうものです。

上海では、上海市宝山区月浦鎮鋼集団公司（以下、宝钢公司）による汚染の被害者である許太生氏、環境NPOの上海根与芽青少年活動中心のヒアリング、ハルピンの現地調査、上海では環境NPOの公衆と環境研究中心、中国政法大学公害被害者法律援助センター（CLAPPV）、環境科学技術研究中心、綠色龍江の各団体のヒアリングを行いました。

中国のNGOはアイデア豊富で、活動している内容がとて面白かったです。日本と中国で活動交流をすることで、両国の環境活動が活発になるのではないかと思います。

リレーエッセー

「アーカイブ」をご存知ですか？

これまで長いあいだ保存されてきた記録、あるいはこれから保存されるべき記録のことを、「アーカイブ」といいます（そのような記録が保存される場所や施設も、「アーカイブ」と呼ばれています）。紙や写真、音声や映像など、記録の私たちはさまざまです。そして、そんな記録を集めたり、集めたものをひとつひとつしらべたり、傷んだものを手当てしたりする人のことを「アーキビスト」といいます。

あおぞら財団付属西淀川・公害と環境資料館（エコミュージズ）も、たくさんの方のアーカイブを保存して

みつけてみませんか？ あなたのそばの「アーカイブ」

森本 米紀

いて、スタッフの私は、アーキビストとして働いています。

ところで、皆さんのおうちに「アーカイブ」はありますか？

いやあ、うちにそんな古い記録なんてないなあ。いえいえ、それがそうでもないんです。

家族旅行の写真、お子さんの運動会のビデオ、文集や卒業アルバム。去年の手帳、家計簿、日記。町内会の議事録や町の風景写真―それもみんな「アーカイブ」なんです。家族の歴史を伝える「家族のアーカイブ」だった

り、地域の歴史を物語る「地域のアーカイブ」だったりするんです。あ、これ「アーカイブ」かも―

その気づきが、家族や地域の歴史を未来につなぐ、第一歩になります。

いちど、押入れ、クローゼット、引き出し、本棚、物置を見渡して、あなたのそばの「アーカイブ」をみつけてみませんか？

（もりもと まき・エコミュージズ資料整理スタッフ）

なにげない写真も「アーカイブ」

左：岡崎久女氏資料No.49

右：西淀川公害患者と家族の会資料No.3291



- 2日(月) セミの抜け殻調べ 事前説明会
- 3日(火) 軒先そうじの日
事務局会議
ESDOJT研修会議
大阪経済大学地域社会調査授業 空気の汚れを調べてみよう(～4日)
- 4日(水) 広報会議
- 5日(木) 公害地域の今を伝えるスタディツアー2010～新潟・水俣病の地を訪ねて(～9日)
- 6日(金) あおぞらプロジェクト大阪幹事会
ボランティアの日
1階交流拠点大工指導
- 9日(月) 昭和電工ヒアリング(新潟スタディツアーとして)
- 10日(火) 公害をなくす会幹事会
- 11日(水) 事務局会議
常務会
- 16日(月) 西米寺万燈会(参加)
- 17日(火) 大野川緑陰道路でセミのぬけがら調べ
- 19日(木) てづくりせつけん教室
関上哲氏西淀調査受入れ(～20日)
- 20日(金) 寝屋川市教育委員会フードマイレージ(講師:林)
- 21日(土) 吹田市立博物館フードマイレージ(講師:林)
- 西淀川交通まちづくりプロジェクト「西淀川の交通移動について考えてみよう」第3回
ECOまちネットワークよどがわ(出席)
- 23日(月) 事務局会議
- 24日(火) 西淀川高校畑作業
道路環境市民塾セミナー まちづくりと交通基本法
- 25日(水) 西淀川IESD全体会議
自転車寺子屋
京エコロジーセンターヒアリング
- 28日(土) 大気汚染経路情報発信事業中国ヒアリング調査(～9月2日)
- 30日(月) エコドラ会議

8月

事務局日誌

9月

- 1日(水) 図書館展示搬入
- 第39回公害・環境デー事務局会議
- 2日(木) 「赤バスに関する説明会」(参加)
- 3日(金) ボランティアの日
リベラ発送
- 4日(土) ガーデンサイクルツアー
- 5日(日) 西淀川子育てプラザ代表者会議
- 6日(月) 藤川先生ほか来所(西淀川研究会～7日)
- 7日(火) 軒先そうじの日
事務局会議
西淀中学校2年生来館
- 8日(水) ECOまちネットワークよどがわ(出席)
歌島中学校職場体験(～9日)
- 9日(木) てづくりせつけん教室
- 10日(金) 大阪から公害をなくす会幹事会
西淀中学校2年生来館
中央区トライアルプラン交流会
- 11日(土) 京都自由学校「自転車の生活のススメ」(講師:藤江)
- 12日(日) フードマイレージ教材化研究会
新上区総庁基本設計ワークショップ①
泉北菜の花プロジェクトキックオフ会議(講師:林)
- 13日(月) 大気全国連合会
将来構想委員会
スタディツアー一括会議
ESDOJT研修会議
- 14日(火) 第39回公害・環境デー第1回実行委員会
事務局会議
環境と観光をつなぐ研究会ワーキング会議(出席)
- 15日(水) 広報会議
あおぞらプロジェクト大阪府申し入れ
千代田高校フードマイレージ(講師:林)
- 16日(木) FMCOOLOO収録(林)
- 17日(金) 徳島ぶらりエコカフェ(講師:藤江)
- 18日(土) 大阪歴史博物館内覧会(参加)
佃中学校 職場体験実習
- 18日(土) 緑の募金
アセス学会
西淀川図書館キャンドル作り(講師:林)
- 19日(日) 東淀川区民まつり(参加)
- 21日(火) 事務局会議
自転車寺子屋
- 22日(水) 資料館定例会議
交通まちづくりヒアリング～自転車の状況(区役所)
区内まわり
- 23日(木) 千舟町会旅行(参加)
菜の花プロジェクトツアー in 京丹後～現場に学ぶつながる交流する～
平松市長と語る地域懇談会
- 24日(金) 患者役員会
外島保養院慰霊祭(参加)
- 25日(土) 西淀川区民まつり(参加)
- 28日(火) オープンハウス学習会
- 29日(水) 事務局会議
道路環境市民塾運営委員会
常務会
- 30日(木) 第39回環境・公害デー事務局会議
日本環境教育フォーラム・学習院大学・環境省ヒアリング
- 31日(金) 子どもの参画へんきょう会
ぜん息患者懇談会
ECOまちネットワークよどがわ 拡大編集会議(出席)

お知らせ

矢倉海岸定例探鳥会

(日本野鳥の会大阪との共催)

日時 12月4日(土)、2011年1月8日(土) 午前9時

集合 30分～午前11時30分頃

場所 阪神電車なんば線「福」駅

改札口 午前9時30分

場所 矢倉海岸公園

日時 12月22日(水) 18:00～

場所 大野川緑陰道路(足踏み広場、あおぞらビル1階)

あおぞら財団「ボランティアの日」
日時 12月3日(金)、2011年1月7日(金)

場所 あおぞら財団事務所内

時間 (例外あり)

午前9時30分～午後5時30分(応相談)

キャンドルナイトin西淀川

～廃油キャンドルで緑道を灯そう～

日時 12月22日(水) 18:00～

場所 大野川緑陰道路(足踏み広場、あおぞらビル1階)

お礼

(8月・9月 敬称略)

●寄附・寄贈者

浅井真二、安藤俊介、石井琢也、上杉剛、植田和弘、片岡直樹、環境友好公益協会、北泊謙太郎、功刀恵美子、酒井健一、土井妙子、新田保次、坂東克彦、山本元

●お助けボランティア参加者

浅井真二、大野みさ子、香川史篤、小坂茂樹、小城、佐成志朗、立花勇人、谷畔ツバサ、徳満勇太、二星文哉、萩原公恭、三宅直樹

●インターン参加者(順不同)

石川正樹(環境学園専門学校1年生)、長谷川まや(同志社大学3年生)、池田玲菜(京都府立大学3年生)、松永由希(滋賀県立大学3年生)、森口紗奈絵(京都精華大学3年生)、西村友希(桃山学院大学3年生)、田中育絵(桃山学院大学3年生)、中井智裕(近畿大学3年生)、岡松成美(近畿大学3年生)、中森洋介(近畿大学3年生)、小形亮(大阪経済大学3年生)、高原阿友美(大阪経済大学3年生)、馬場勇介(大阪経済大学3年生)

【編集後記】 やっと1階の改修工事に目途がつき、オープニングイベントを開催する段階となりました。何もなかったところから、少しずつ壁が立ち、床がはられて形になっていく様子はまさに子どもを育てていくのに似ています。多くの人の手を借りて大きくなっていきます。これからは地域の交流拠点として住民のみなさんから愛される場になることを願います。(K)

『Libella』No.117 2010年11月号(隔月1日、年6回発行)
発行所 (財) 公害地域再生センター (あおぞら財団)
編集人 真銅麻衣子

大阪市西淀川区千舟1-1-1 あおぞらビル4階
Tel.06-6475-8885 Fax.06-6478-5885
http://www.aozora.or.jp/
E-Mail webmaster@aozora.or.jp

印刷所 あゆみコーポレーション
定価 一部400円(郵送料込み)

会員の購読料は会費に含まれています。
郵便振替口座 00960-9-124893 (加入者名 あおぞら財団)
乱丁・落丁はお取り替えます。本紙掲載記事の無断転載を禁じます。



Tao 舎を屋号に、環境・教育・まちづくりに関する企画やファシリテーション、参加体験型のプログラム開発や人材養成等を行っている。あおぞら財団職員・林さんは中高時代の先輩。反抗期真っ只中の大滝と血気盛んな林さんの、寮での同室当時の闘い(?)は、今も色あせぬ“若かりし”共通体験。

おおたき
大滝 あや

言葉の情報を記録するよりも 皮膚で記憶することを大切に

「公害地域の今を伝えるスタディツアー」に関わりはじめて二年。自分が公害問題・公害教育に携わることになるとは思っても

みませんでした。しかし、事業報告書ではなく、第三者にプロセス(その場で起こったコトや、参加者の感情の揺れ等)が伝わる冊子を作成してほしいとの無謀な(?)オーダーに触発され二つ返事で引き受けてしまったのです。そこで、冊子にとどまらずダイジェストレポートやWEBの作成…とどっぷり関わることになった私が、



本ツアーの記録編集にあたり大切にしている「勘どころ」をご紹介します。

聞き取るのではなく取り込む

事実は正確に記載する必要がありますが、事実のみを記載しても「伝わる読み物」にはなりません。そこで、話の内容もさることながら、話し手のトーンやスピード、表情、身振り、また聞き手の表情、メモする手の動き、その場の空気等できるだけ多くの要素を、自分自身の中に一旦取り込む感覚で身を置きます。ともすると、記録者は「その場」に距離を置き、外から眺めてしまいがちですが、言葉の情報を記録するよりも皮膚で記憶することを大切にしています。

大切な要素を抽出し絞り込む

本ツアー編集作業の難しいところは、同時並行で四つの班が動くことです。全グループの全行程に身を置くことは不可能なため、各班に一人記録スタッフをお願いしています。編集作業では、各班で語られた

の言葉も無駄にしたいくない気持ちと、第三者に伝えるために本筋を際立たせたい気持ちに揺れながら、記録と自分自身の皮膚記憶をすり合わせます。言い換えると、複数の目から見た出来事と、話し手の言葉、聞き手が受け止めた感覚を元に、どの部分を抽出することがA班の特徴になるのか、どの部分を削り落とすことでB班のリアルさを表現できるのかを絞り込み、一つの読み物へと紡いでいくことに力点を置いています。

伝えると伝わる

私自身はフィールドワークの専門家でもプロのライターでもありませんが、現場に赴き、そこで語られる言葉から意味を構築するという役割を通じ、記録編集の「勘どころ」が鍛えられてきました。「伝えること」と「伝わること」は違いますし、ナマの質感を伝えようといくら努力しても直接体験には敵いません。それでも、伝わる「公害地域の今を伝えるスタディツアー2010」をめざし、目下編集中です。